

# 次の世代を育てる 教師を育てたい

“カリスマ英語教師”が関西大学へ——  
「陸の上でボートの漕ぎ方を教えても意味がない」

田尻 悟郎 ◆関西大学外国語教育研究機構 教授

本年4月から関西大学外国語教育研究機構の専任教員に加わった田尻悟郎教授は、日本の英語教育界の最高賞である「パーマー賞」の受賞者で、独自の英語教育法が高く評価されています。「ニューズウィーク(日本版)」で世界のカリスマ教師の一人として紹介されたのをはじめ、英語科教育にとどまらない幅広い生徒指導方法が注目を浴び、多くのメディアでも取り上げられてきました。中学校の英語科教諭から大学教授に転身したいきさつ、日本の英語教育のあり方、効果的な指導方法などを聞き、その授業を取材しました。

## ◆生徒の発想に鳥肌が立ってくる

——バリエーション豊富な独自の教育方法は、どのようにして生み出されたのですか。

語学が一朝一夕に習得できないように、授業の方法も毎日の積み重ねの中で気がついていくことが多い。それは試行錯誤の連続です。

中学校の修学旅行で京都の嵐山へ行った時に、こんなことがありました。ボートに乗る前に、懇切丁寧な漕ぎ方の説明があったのですが、子どもたちはもう集中力が切れてしまっているの上空です。いざ乗ってみると、漕ぐどころではない。ぐるぐる回転しながら流されていく。「怖い、先生助けて」と叫ぶ。こちらも大声で漕ぎ方を指示しました。

そこで、いくら説明しても、やってみないと分からないことに気がつきました。陸の上でいくらボートの漕ぎ方を教えても意味がないのです。ガイダンスをしたらすぐに水の中に入れて、自分で漕がせてみることに。じっと見ていて、ここが間違っているよと教えるか、生徒が分からない、どうしたらいいのといった時にアドバイスを与えるのが、先生の役目だと気がつきました。質問してきたら「じゃあ今から説明するよ」と言うと、みんなが聴くのです。ほとんどの授業は、生徒が教えてくれと言う前に説明を始めるでしょう。そうしたら彼らは聴きません。

生徒に主体性をもたせる授業に変えてから、みんなよくしゃべるようになり、出てくる発想が面白くて、そう来たか、なるほどなあと、鳥肌が立ってくることもあります。子どもってすごいなあとと思います。授業のスタイルが変わってから、毎日感動があるのです。

関西大学では経済学部などで1年次の英語の授業も担当していますが、毎回とても勉強になります。学生さんは隣の人と相談し、勉強の手伝いをするなど、恐らくこの数年間したことがなかったはず。隣の人と話ができず、シーンとなっても、一対一で始めると必死で頑張ります。互いに親しくなってくるとペア学習、グループ学習もできるようになり、教室に活気が出てきます。今、すごく面白くなってきているところです。

## ◆同じ材料で人と違ったものを作る喜びを

——26年間にわたる中学校での英語科教育の経験から、日本の英語教育の問題点はどこにあるとお考えですか。

日本語では外国の人と話を通じないので、携帯電話のように英語を使う必要があるわけです。その携帯電話は最低限の機能、話ができるという機能があればいいわけで、それを正しく使える人間を育てることが最も大切なのに、機能を上げることばかりしているのです。子どもは携帯を使って外国人と話せた喜びから、自分で研究して性能を高めていきます。そういう気持ちにさせれば勝手に伸びていくのです。それを先生が押さえつけて、無理やり伸ばそうとしているのではないのでしょうか。

また、われわれが子どものころは、知識を手に入れたら良い暮らしができるとされた時代でした。テレビや冷蔵庫、クー



ラー、車が欲しいとなれば燃えるのです。今はすべて身の回りにあり、おなかいっぱい状態で意欲がわかない時代なのです。

それでも、今度のテストで400点を取ったら、あのゲームソフトを買ってやると言われると生徒はすごく燃えます。また、友達と何人かで勝負するという時は、驚くほど勉強します。空腹感と競争の意識があると燃えるのは、われわれの時代と変わりません。

——では、どのような授業が必要ですか。

まず、知識を詰め込むことではありませんね。それは冷蔵庫の中に食材を買って入れることであって、放っておいたら腐っていく。冷蔵庫を開けてその食材をテーブルに並べて、クラス全員が同じ食材でどんな料理を作るか勝負し、組み合わせで違ったものを作る喜びを味わわせることが必要です。人と違った料理を作ることで、意欲的に足りない食材を買いにいくはずですし、食材を手に入れるためには苦労が伴うことも知ります。

英語の日記や自由な英作文のノートもそうですが、単語を組み合わせて新しいもの、人と違ったものを作る、いわばものづくりを経験させる必要があります。資源のない国が輸入をし、それを加工して、より良いものを作って生きてきた工夫ですね。次の世代を担う人に、授業の中でのものづくり的な経験をさせなければ、この国の将来は明るいものになりません。

英語日記は、私自身も勉強になりました。こんな表現があるのかと辞書を引きまくり、本当に使えるかどうかを外国人指導助手(ALT = Assistant Language Teacher)に聞いたりして、自分の力が伸びていくという経験をしました。

## ◆自分が楽をして教えることはできない

——英語の教科指導以外に、生活面を含む生徒指導の点でも、指導力が高く評価されています。

私が神戸で中学の教員になったころは、全国的に校内暴力の嵐が吹き荒れていました。最初の2年間は授業が成り立たないほどで、日々格闘し、本当にしんどかったですね。力づくで押さえることが決して正しいことだと思っていないので、家に帰っても家族に当たったり、風呂に入って叫んだり、常にいらしていました。授業がうまく行かない分、野球部の指導に力を注ぎました。



■インタビュー



田尻悟郎（たじり ごろう）

1958（昭和33）年島根県生まれ。島根大学教育学部卒業。兵庫県神戸市の市立中学校教諭を経て、島根県の市立・町立の中学校5校に勤務。2007年4月関西大学教授に就任。2001年に財団法人語学教育研究所より「バーマー賞」を受賞。「ニューズウィーク（日本版）」（2004.4.28）で、世界のカリスマ教師の一人として紹介される。著書に『楽しいフォニックス』（教育出版）、『日本の英語教育に必要なこと』（共著 慶應義塾大学出版会）など。

毎年強いチームを築き上げている他校の野球部の監督に食い下がり、指導の極意を聞いたこともあります。すごく厳しい先生なのに、いろいろな角度から子どもたちの良い点を見つけ出して褒め、やる気にさせる。「何のためにこの練習をするのか、試合でこういうプレーをしたい、こういう選手になりたい、そのために今こういう地道な練習をしているということを子どもが理解した時に苦痛ではなくなるんや。授業も野球と同じや」と言われて、目が覚める思いがしました。

自分が楽をして教えることはできません。学生・生徒にさせる分、こちらも付き合っ、先生もようやってくれていると思った時に彼らは初めて心を開くわけで、していない人間がやれと言っても続きません。

今も毎週、中学校の生徒指導の研修に呼ばれたり、荒れている学校の先生方のお話を聞いたりしています。やっていることを褒めてくれる上司、痛いなあと感じてもの的確なアドバイスや納得できる言葉をかける上司がいるところは、学校が変わっていきます。学校でも、会社でも、次の世代を育てる上司がいるかどうかで決まってしまうと思います。

自分が楽をして教えることはできません。  
学生・生徒にさせる分、こちらも付き合っ、  
先生もようやってくれていると思った時に  
彼らは初めて心を開くわけで、  
していない人間がやれと言っても続きません。

## ◆「教員を辞めて、教員養成をしなさい」

——大学で教える道を選択した理由は？

年間100人ぐらいの方が授業を見に来てくださって、いろんな質問を受けるようになりました。毎日のようにお客さんがいらっしゃる、中学校の先生方も気を使っくださるし、学年主任をしていましたので、生徒指導の時間も必要です。これだけ多くの先生方が困っいらっしゃるなら、カウンセリングのような形でかかわることができるのではないかと考えたことも理由の一つです。

それから、ドイツのシュタイナー教育に基づく英語教育の第一人者であり、広島大学大学院客員教授だったクリストフ・ヤフケ先生が私の授業をご覧になり、シンポジウムでディスカッションした際、「すぐに教員を辞めなさい」と言われたことです。「なぜですか」と聞くと「教員養成をしなさい」と。「僕は授業をもっとしたい、授業は楽しいし、感動がいっぱいある」と言う、「あなたは楽しいかもしれないが、その恩恵を被るのはあなたの生徒に限られる。もしあなたが先生方を育てて、その先生の生徒たちがあなたの生徒のような思いができるようになれば、何万人という生徒が恩恵を被るのではないか」とおっしゃいました。

もっと授業を続けたいというのはあなたのエゴだと言われたのが、きっかけになりました。また年齢的にも、次の世代を育てるべき時が来たと思っています。

## ◆英語科の教員である前に、教師であれ！

——関西大学の印象はいかがですか。

まず、良い先生がそろっているということです。自分でもそう思って本学を選んだのですが、英語を専攻している学生たちが言うのです。質問に来た時などに「関大は楽しいか」と聞けば、「こんなにいい先生がそろっている大学はないですよ、最高です」と。

彼らは授業になって逃げられない立場になると、一生懸命やります。本気になればすごい力を出してきます。彼らの高い能

力を引き出してあげるのが仕事だと思うと楽しいですね。

大学生ぐらいになると大人になってきて、もう自分なりの考えを持って冷めてしまっているだろうと思っていたのが、あそこまで学生が変わり、中学生みたいに乗っけて一生懸命やるというのは、予想していなかったことで驚きました。

——今後、特に力を入れていきたいことは？

先生を養成するコースの英語科教育法では、まず英語科の教員である前に教師であるということを教えていくつもりです。教師というのは、次の世代の人を育てるのが仕事。教育は国をつくり、世界をつくっていくということを認識した上で、その中で自分の担当教科が英語だということを教えていきたい。

一般教養では、英語って面白くないものだと思っている学生もいれば、入試で終わったはずなのにまだ英語を勉強しなければいけないのか、もう嫌だという学生もいる。彼らを引っつけていかなければならないので、さらに指導力を磨かないといけないと思っています。この二つを同時進行しなければなりません。

## 教科指導と 生徒指導を両立させる

### ●田尻教授の講義を聴く

関西大学外国語教育研究機構は2000年4月に開設されました。全学の学生に対し実践的な外国語教育を、教職課程の受講生に対しては、英語科教育法などの教科教育法科目を提供しています。現在、英語・ドイツ語・フランス語・ロシア語・スペイン語・中国語・朝鮮語・日本語の専任教員37人が所属。また、同機構設立と並行して、文学研究科内に増設された外国語教育学専攻（修士課程）を発展・独立させ、外国語教育学研究科の大学院博士課程前期・後期課程が、2002年4月に開設されました。

今年5月18日、田尻教授が担当する大学院の「外国語教育特殊研究（授業実践論）」の講義がありました。テーマは「中学校の英語の問題点と解決策」。英語教育の現場で予想される問題点として院生が挙げたのは、規律、教科書、学力格差、教師の英語力、評価、発達段階…。その中から、まず学力格差について検討するため、3～4人のグループに分かれて話し合い、意見を発表しました。

解決策として、少人数・習熟度別の学習が提案され、田尻先生は「クラスを2つに分けたり、1つに戻したり柔軟に対応する必要がある」とアドバイス。習熟度別クラスの是非については、「できない子がコンプレックスを持つ」などの反対意見が多く出されました。その解決法を探り、英語でのコミュニケーションのあり方、ペア学習が成功するポイントとうまく行かない要因などを考えました。



また、荒れている学校からの依頼で、その原因を探り、先生方と一緒に解決策を求めて話し合いをすることも、できる限り続けていきたいと思います。生半可な努力ではいけないことを痛感しています。



### ●授業を受けてよかったというものを残す

授業では、田尻先生は絵の入った単語カードのコピーを配り、具体的な使い方を説明しました。生徒が楽しみながら力をつける方法は、長年の経験が蓄積された田尻先生の十八番です。歌や映画はもちろん、ゲームやクイズ、面白い手作りの小道具などを活用し、楽しんで学び、夢中になって英語を使うところまでもっていきます。添削しコメントを添えて返す英語自主学习ノートは、1年間に1万5千ページになったと言います。

「日本で暮らしていくなら英語を使わなくても生きていけるのに、年間105時間、3年間で315時間も耐えて教室に座っているわけですから、やっぱり授業を受けてよかったというものを残してあげないといけない」



生徒主体の授業スタイルも、特色の一つです。対一で行う口頭の小テストでは、実力がついた生徒を先生役にして、お互いにやる気を引き出します。一方、教師は一層の配慮が必要な生徒と対一で向き合います。教科指導と生徒指導を両立させる方法が、今、注目を集めています。